

長崎大会 第4分科会「見て聞いて学ぼう、ナガサキ」では、山川剛（やまかわたけし）さんと、西岡由香（にしおかゆか）さんのお二人からご講演をいただきました。

山川さんからは、まず、原爆投下前の戦時中の様子についてお聞きしました。竹やりの練習、「つよい体」という書き初めの裏の意味は「国を守れ」であったこと。言いたいことが言えず窮屈な中で、学校で先生が人殺しを教えるのが、戦争であるということ。それらの話にとっても衝撃を受けました。

次に原爆投下の際の様子です。夏でも暗闇の中で震える様子。サイレンが鳴らなかった動揺、各地域の判断で鳴らされた鐘の音など、想像すると苦しくなる情景でした。被爆者として、願い、二度と被爆者を作らないためには、核兵器0以外ありえない。核兵器0は実現可能であるということ、他国を例にしながら教えていただきました。

山川先生のお話がとても分かりやすく、次へ語り継ぐために必要なものを多く学ぶことができた時間でした。

西岡さんからは、今距離を越えることのできるリモートが定着しつつありますが、距離だけではなく、その当時生きていた方達との時間軸をも超えるリモートとして、紙芝居、漫画を踏まえながら、今の私たちと変わらず普通に生きてきた一人一人の被爆体験を紹介していただきました。お話の中で、戦争の最初の犠牲は真実、戦争で負けていることは感じつつも伝えられず、口に出すことも許されなかった。次の犠牲は文化、教育、音楽や図工がなくなり「ほふく前進」や「手りゅう弾投げ」の練習に変わっていったそうです。

防空壕に入れるのは即戦力となる、学年が上の子からで、防空壕がいっぱいになると小学1、2年生の子は敵機が飛ぶ中で自宅へ帰される、命に優先順位がつけられるのが戦争である、ということを感じました。

会場からの質問で、伝える時に大切にしていること、次の世代へ期待していることをお二人からお伺いしました。「当事者になること」紙芝居の読み聞かせなど体験を通すこと、「想像力を育むこと」平和教育の間口を広く、例えば「いただきます」というフレーズを、命をいただくことに気づかせ、命を大切に考えられるようになるなど、年齢が低いうちから伝えられることはあるというお話を聞くことができました。

最後に、西岡さんが被爆体験を漫画にすることについて、山川さんから背中を押してもらった言葉をお伝えします。

「僕たちが体験したことの1万分の1でもいいから描いてほしい。じゃないと0になってしまう。」

この言葉はこれから次の世代へ繋げていく私たちにとっても、励みになる言葉です。今日の聞き手は明日の語り手、自分たちのできることから頑張ろうと思える分科会でした。

運営委員／千葉聡美（日本教職員組合）